

遍照心院文書について

新潟県立歴史博物館の所蔵する『越後文書宝翰集』は、全44巻の古文書群として国指定重要文化財となっていますが、その以前には、『越佐文書』という名前で新潟県指定有形文化財に指定されていました。ただし、『越佐文書』の新潟県指定文化財指定書には、全45巻と記されていました。『越後文書宝翰集』より1巻多かったことになります。

その1巻は「^{へんしょうしんいんもんじょ}遍照心院文書」といいます。遍照心院は、現在の京都市南区に所在する寺院です。清和天皇の曾孫にあたる源満仲が父の墓所に一字を建立したことがはじまりで、貞応元年（1222）、源実朝の妻本覚尼が真空回心上人を招き、萬祥山遍照心院大通寺と名付けたとされます。

「遍照心院文書」は、この寺院に関わる古文書の一部で、戦国時代を中心とした5通がまとめられています。こちらも当館が所蔵して

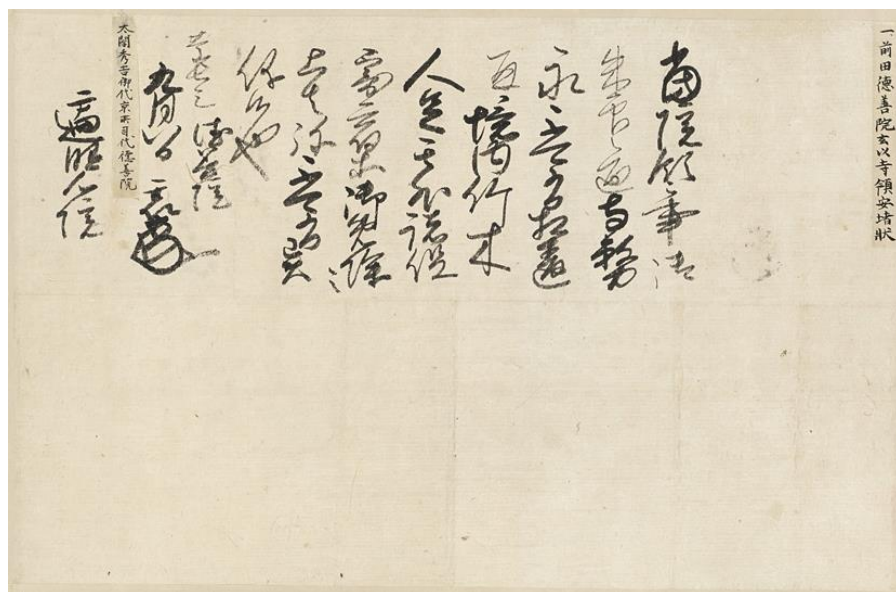


写真1 遍照心院文書 前田玄以寺領安堵状

『越後文書宝翰集』は、中世の越後国で活躍した国衆十二家の相伝文書（国指定文化財等データベース <https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index> 参照）、というまとまりなので、「遍照心院文書」は、そのなかには含まれなかったようですが、戦国時代頃に書かれた大変貴重なものです。機会を見て展示公開したく思っています。（前嶋 敏）

苧績みチャレンジ！

新潟県が誇る産物に「越後上布・小千谷縮」があります。和服好きなら憧れる夏物の名品です。今回は、越後上布・小千谷縮の糸について考えてみます。現在、私たちの身の回りの衣料には、ポリエステルのような化繊が多く使われていますが、コットン（綿）やシルク（絹）、ウール（羊毛）など自然由来の繊維を利用したものもあります。そのうちの「麻」は、シャリ感のある生地が日本の夏に適し、現在でも夏物として人気です。「麻」は、衣料に用いられる植物の繊維の総称で、実際には様々な植物が原料とされています。そのひとつに「苧^{ちよま}麻」と呼ばれる植物があります。苧麻はイラクサ科の植物で「からむし」とも呼ばれます。越後上布・小千谷縮はこの苧麻の繊維から作られています。

ここでふと浮かぶのは、どうやって植物から布を…？という純粋な疑問です。植物を糸にしなくては布にはなりません。では、どうやって糸に？と、報告書を読んだり、画像を見たりと手を尽くしましたが、わかりませんでした（笑）。ただ、「苧^お績み」という方法を知っただけです。でも、どうしても手を使った技術なので、書いてあることから想像するけど、実際はよくわからないという状態。そこに救いの手を差し伸べてくださったのが津南町の廣田幸子さんでした。当館でアングイン復元の際にも尽力してくださった、植物物衣料のスペシャリストです。お宅にお伺いした際に、手取り教えてくださいました。実際に手を動かしてみると、わ

かることが増え、発見が生まれます。何事もチャレンジです！

（岩瀬春奈）

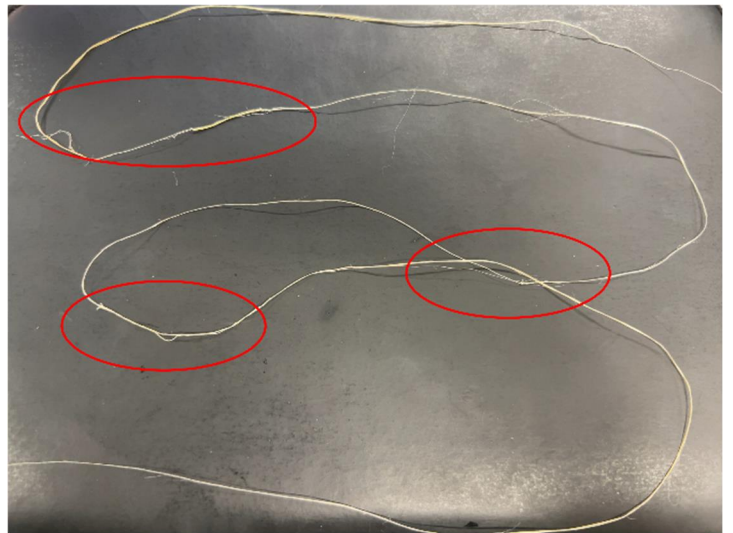


写真2 実際に教えてもらって苧績みした苧麻

（赤で囲ったのが繋いだ部分）難しかった！

～編集後記～

春季企画展「The Ancient Glass 古代ガラスの3つの軌跡」が閉幕しました。7月11日からは、夏季テーマ展「戦後80年 私の戦争体験記 銃後の日々」を開催します。

ちょうど展覧会の合間となった6月号は、資料紹介と冬季テーマ展の資料調査の一面を紹介しました。7月号・8月号では、当館が今年開館25年を迎えることを記念して、開館時のメンバーがその当時を振り返ります。乞うご期待。

「れきはく通信」は、新潟県地域史研究ネットワークニュースと同報のほか、月末更新となる新潟県立歴史博物館のホームページでもご覧いただけます。不定期配信とはなりますが、お楽しみいただけますと幸いです。

ご意見、ご要望は新潟県地域史ネットワークニュース事務局までご連絡ください。

事務局メール net@nbz.or.jp